

令和元年度
香川県議会スペイン視察団

報告書

令和元年 11 月 4 日～9 日

スペイン王国

(マドリード州・アンダルシア州)

1 訪問目的

オリーブオイルの生産、品質管理に関して、オリーブの生産管理やオリーブの品質管理・販売方法等について、先進国であるスペインの事例を調査するとともに、I O C (国際オリーブ理事会)との連携強化に向けた意見交換を行うことにより本県オリーブの生産振興に資するもの。

2 訪問場所

スペイン王国 (マドリード州、アンダルシア州)

3 訪問期間

令和元年 11 月 4 日から 11 月 9 日までの 6 日間

4 訪問者

黒島 啓

五所野尾 恭一

谷久 浩一

山本 悟史

随行職員

香川県議会事務局政務調査課

主任 白川 悟士

5 日程

	月 日	地 名	時刻	内 容
1	11月4日 (月)	香川県 羽田空港 パリ マドリード	7:35 8:50 11:40 16:25 20:55 23:00	高松空港 発 羽田空港 着 羽田空港 発 シャルル・ド・ゴール空港 着 シャルル・ド・ゴール空港 発 バラハス空港 着 【マドリード 泊】
2	11月5日 (火)	マドリード コルドバ モントロ	8:30 14:00 16:30	IOC(国際オリーブ理事会)訪問 アンダルシア州立研究所(IFAPA)訪問 AEMO(スペインオリーブ自治体協会)訪問 【ハエン 泊】
3	11月6日 (水)	ハエン バエサ	9:00 10:30 15:30	ハエン県議会訪問 Terra Oleum 博物館 (オリーブ博物館)視察 オリーブ生産者の協同組合訪問 (アグリコラ・デ・バイレン・ビルハン・デ・ソクエカス・協同組合) 【ハエン 泊】
4	11月7日 (木)	バエサ プリエゴ・デ・コルドバ コルドバ マドリード	9:00 11:50 18:29 20:17	オリーブオイル生産者(農園等)訪問 (オレイコラ・サン・フランシスコ) DOP(原産地名称保護制度)組織訪問 (プリエゴ・デ・コルドバ) コルドバ駅 発 マドリード(アトーチャ駅) 着 【マドリード 泊】
5	11月8日 (金)	マドリード ロンドン	10:00 11:30 13:30 15:50 17:15 19:00	在スペイン日本大使館表敬訪問 サンミゲル市場視察 バラハス空港 着 バラハス空港 発 ロンドン・ヒースロー空港 着 ロンドン・ヒースロー空港 発 【機中 泊】
6	11月9日 (土)	羽田空港 香川県	15:50 17:25 18:45	羽田空港 着 羽田空港 発 高松空港 着

6 主な視察等の内容

(1) IOC(国際オリーブ理事会)訪問

11月5日(火) 8:30~10:00

マドリッドにあるIOC(国際オリーブ理事会)を訪問し、プロモーションユニット責任者であるエンダー・グンドゥス氏から歓迎と、IOCとのこれまでの連携・協力について謝意が示された後、各部門担当者からそれぞれIOCの事業説明及び近年のオリーブをめぐるトレンド、生産国及び生産量の動等について説明を受けた。途中、事務総長のアブデルラティフ・ゲディラ氏も参加し、改めて歓迎と謝意を示された。

本県からは、団長である黒島議員がIOCの発足70周年への祝意、本県のオリーブ生産振興等に係る指導助言に対する感謝を伝えるとともに、本県のオリーブ生産等に係る取組みについて説明を行った。

【質疑応答・協議】

1. 化学分析について

化学分析はIOC加盟国にとっては義務であるためすべて行っている。輸出時にその成績書が必要となる。基準となる法律はIOCのスタンダードをもとにEUや各国の法律が定められておりそれらに基づいて実施されている。国内法が無い国に対しては法整備についても支援をしている。

日本は加盟国ではないが、香川県で化学分析を実施するのであれば、IOCは化学分析を開始・実施するための支援を行うことができるのでぜひ化学分析に取り組んでほしい。また、サンプル送付による教育・訓練も実施している(県パネルも官能評価訓練用サンプルの提供をしてもらっている)。昨年は5,500本のオイル送付の実績がある。

化学分析試験所のIOC認定のための技能試験は、年2回の試験が必要で、試験サンプルを該当試験所に送付し、それらを分析し、回答するものである。これは官能評価パネル認定と同様である。

なお、官能評価パネル訓練用のサンプルオイルはこれまで通り要望に応じて小豆オリーブ研究所宛に送付する。

2. 栽培関係について

国際連合食糧農業機関(FAO)ではオリーブの遺伝子バンクを世界で3か所開設している。スペインのコルドバ(今回訪問先のIFAPA)、トルコのイズミル、モロッコのマラケシュである。香川県の新品種を提供してその品種特性の研究をすべきである。

3. その他動向

中華人民共和国においてもIOCはプロモーションを実施中である。官能評価パネル、化学分析試験所ができつつある。



意見交換（中央 グンドゥス氏）



中央ゲディラ事務総長を囲んで

（２）アンダルシア州立農業水産研究所（IFAPA）訪問

11月5日（火）14:00～15:30

アンダルシア州農業水産研究所（IFAPA）を視察のため訪問した。IFAPAはスペイン語では、「Instituto de Investigación y Formación Agraria y Pesquera」の略称であり、英語では「Institute of Agricultural Research and Training」と表記している。つまり、研究のみならず教育・研修の機能も有している。

コルドバ県農政局長アラセリ・カブレラ氏から、アンダルシア州の農水産業への取組みに係る説明があり、施設長のフランシスコ・カセレス氏から本施設の特長について説明があった。

州立の農業水産研究所（IFAPA）は7つの研究所がある（うち1か所が水産に特化した研究所）。スペインでも最も古い研究所の一つでその歴史は18世紀に遡る。

当該研究所はアンダルシア州の農業、畜産業、水産業に携わる人々のために以下の分野で研究等を行い技術開発などその成果を還元しそれぞれの分野で競争力を増強している。なお、現場課題については、農家との直接契約による課題解決も実施している。

- ①食物連鎖経済の分野
- ②持続可能な植物保護の分野
- ③食と健康の分野
- ④農業と環境の分野
- ⑤農業食品工業と技術の分野
- ⑥ゲノミクス(ゲノムと遺伝子について研究する生命科学の一分野)とバイオテクノロジーの分野

この研究所の強みは、オリーブに関することである。品種改良はもとより、州内のオリーブ栽培における植栽間隔はこの研究所の成果でもある。また、歴史を有することから、90年間継続している試験もあれば、著名なオリーブ研究者をここから多く輩出するという人材育成にも貢献している。

特に、⑥の分野においてはオリーブの品種改良や遺伝的解析にも取り組み、FAOとの協力により1970年からイタリア、ギリシャ、トルコなどから

品種を収集・保存を開始し、現在 28 カ国から 900 品種以上が収集されており、同一気象条件、管理条件下で品種特性を調査している（いわゆるジーンバンク）。それらの情報は「IFAPA の世界オリーブ遺伝資源コレクション（WOGB-IFAPA）」にまとめられ、他の研究機関からもアクセスできオリーブの研究に活かされている。なお、FAO のオリーブジーンバンクは、世界に 3 か所設置されており、ここ以外では、トルコのイズミル、モロッコのマラケシュである。

品種改良では、近年、超密植栽培専用品種「シキシータ」が開発された。現在の育種目標として、有機栽培に適する特性として耐病性を掲げている。そのほか、整枝・剪定法、植栽に関する技術、かん水法、土壌肥料に関する事なども試験研究課題である。ここで開発された技術は、農家とのネットワークで現地実証を行っている。

日本で初めて開発されたオリーブの香川県のオリジナル品種「香オリ 3 号」「香オリ 5 号」についてもここで特性調査をしたいので、ぜひ送付して欲しい、とのことであった。



オリーブの品種研究等について事例紹介と試験場を視察

（3）AEMO（スペインオリーブ自治体協会）事例調査

11月5日（火）16:30～18:00

AEMO は、オリーブを栽培している自治体を結ぶスペイン最大のネットワークで、代表はモントロ市役所。会員数は約 130。県議会、郡、連邦、市町村等からなる（AEMO は ASOCIACIÓN ESPAÑOLA DE MUNICIPIOS DEL OLIVO の略称）。本部はコルドバの前述（2）の IFAPA 内にある。

主な目的は、オリーブの販売等を促進する活動を実施する中で会員の経済的、社会的発展を促すことである。

モントロ市の市長のアナ・マリア・ロメロ氏（同氏は AEMO 代表のほかヨーロッパ会議の議長も務めており活発に活動中）から歓迎と当協会に係る説明があり、AEMO 事務局長のホセ・マリア・ペンコ氏から活動事例等について具体的説明があった。

活動内容は、大きくは「オリーブ文化の普及」と「オリーブ生産者が自立経営を維持できる技術経営指導」の 2 つである。そのための AEMO のアクションとして次の 4 項目がある。

①健康

地域の問題となっている子どもの肥満の解消の一助としてオリーブオイルの有益性を訴えていく。

②オリーブとオイルの文化の醸成

見本市やオリーブ文化の普及のためのプロモーションを実施する。

③品質と企業

会員等に向け品質の高位平準化をサポートする体制を作る。

④環境とオリーブ園地

オリーブの栽培がCO₂の削減に一定の効果があり、温暖化対策にも有用であることを訴えるとともに、持続可能な農業を確立・普及する。

以上の4つを訴求力として打ち出し、オリーブの生産振興、消費者教育、消費拡大等を進め、主目的である会員の経済力等の向上に努める。

今回訪問したラス・モンハス農園の歴史は1740年にまで遡る。旧式（圧搾法による採油法）の搾油所は1970年にその役目を終えたが、20世紀の終わりに専門家の文化的、建築的見地の助言により修復し、オレオトゥーリズム（オリーブによるグリーンツーリズム、オリーブの生産地や歴史を学ぶツアー）などのコースにも組み込まれている。



上写真中央の女性がモントロ市長のアナ・マリア・ロメロ氏



歴史的建物内でオリーブオイルの生産者とともに意見交換、新油のテイスティング*等を実施

(4) ハエン県議会訪問

11月6日(水) 9:00~11:00

ハエン県議会のプロモーションと観光部門のディレクターであるアナ・フェルナンデス氏からハエン県のオリーブオイルのプロモーション等に係る取組みについて説明があった。

説明に先立ち、ハエン県とオリーブに関するビデオ、「オリーブ文化、未来に見える古代の知識」と「ハエンでのオリーブの旅」(2編計約20分)が上映された。

「オリーブ文化、未来に見える古代の知識」では、ハエン県における、オリーブの歴史、農業としてのオリーブ(生態、栽培から高品質エキストラバージンオリーブオイルになるまで)、そして、農業としてのオリーブが現在では農産物生産のみならず、発電、ガストロノミー、観光等々を支える産業となっており、オリーブはハエン県の「文化」であることを訴えていた。

「ハエンでのオリーブの旅」では、ハエン県に広がるオリーブ園地、オリーブしかない風景、歴史を象徴する古木、オリーブオイル、食、コスメ、博物館、宿泊、癒しなどのハエンでのオリーブの旅が人に幸福をもたらすことをイメージしたプロモーションビデオとなっている。

ハエン県議会では、県内のオリーブオイルを主要産業として支援することを目的としたプロモーション及び商業活動を展開している。その一環としてハエン・セレクション(ハエン県産のエキストラバージンオリーブオイル品評会で、ハエンの生産者にとって最重要視されるコンテスト)を後援し、受賞オイルに対して下記の支援を行っている。

- ・見本市やイベントでの展示
- ・国内外ミシュラン3つ星レストランへのオイルの提供
- ・オイルを使った料理コンクールへのオイルの提供
- ・ハエンの新オイル祭、ドキュメンタリー映画のスポンサー等

この他にも、健康面での有益性にアプローチしたプロモーションや文化的側面に訴求したオレオトゥーリズムのプロモーションなども推進し、人々の生活の中にオリーブオイルを根付かせることにも努めている。



ハエン県議会の取組みに関し、質疑応答を実施

(5) テラオレイム博物館（オリーブ博物館）視察

11月6日（水）11:40～13:10

オリーブ文化（栽培、科学、オリーブオイル、産業、食育）の普及拠点として設立され、2014年開館した。運営は、アンダルシア農業漁業庁やハエン県議会などが後援して設立されたオリバル財団が担っている。

館長のホセ・マルサル氏から当館の説明があった。主たる対象は消費者であり、プログラムは子どもから大人まで対応可能であるが、子どもたちが学校の授業の一環で来ることが多い。オリーブ関係の会議開催にも対応できるようになっている。

館内の構成は①オリーブの科学・知識を学ぶ区画、②オリーブオイルの一般にもプロにも対応可能なテイasting（官能評価としての）区画、③オリーブオイルの採油体験・実験（ラボ）区画、④調理室区画（イベント開催時に利用）、⑤レストランスペース、⑥高品質オリーブオイル展示・テイasting区画、⑦会議場、⑧オリーブに関する書籍やグッズ販売区画、からなっている。

（代表的な取組み）

- ・オリーブの科学・知識を学ぶ場の提供
- ・消費者、プロ向けテイastingプログラムの提供
- ・イベントの開催
- ・高品質オリーブオイル展示



博物館の取組みの説明を受ける



ホセ館長と説明後

(6) アグリコラ・デ・バイレン・ビルヘン・デ・ソクエカス協同組合
(AGRICOLA DE BAILEN VIRGEN DEZOCUECAS. COOP. AND.) 訪問

11月6日(水) 15:30~16:30

オレオトゥーリズムを担当するナタリア・ソレル氏女史から施設の案内その説明を受けた。

2009年に Agrícola de Bailén (1927年発足) と Virgen de Zocueca (1957年発足) の両協同組合の合併で誕生した組合。オイルの高品質化のため2015年に現代的な採油所および施設を1280万ユーロ(約16億円)費やし完成。

合併により、協同組合に属する農家は1,000を超え、栽培面積は5,000haと拡大した。「ピクアル」種のみを栽培している。

ヨーロッパで生まれた食品安全規格であるBRC、IFSの認定を受け、トレーサビリティについても保証されている。従前の協同組合で見られる古い構造や思想は一扫され、施設内の清潔に保たれている。

2011年に高品質エキストラバージンオリーブオイルのブランド「Picualia」(ピクアリア)を誕生させ、その年にはハエン県の生産者としては最高名誉であるハエン・セレクション賞を受賞した。

2015年から2018年まで3年連続で上記の賞に輝く。2016年にはAEMOが主催する2015年スペイン最優秀採油所賞も獲得した。

施設では、収穫・採油シーズンに消費者にその体験もできるようにしているほか、施設内には同組合の製品等を販売するショップや収穫をバーチャル体験できるスペースも設置しており、将来的にはレストランも設ける予定である。



地元組合員たちと



清潔な工場内

(7) オレイコラ・サン・フランシスコ有限会社訪問

11月7日(木) 9:00~10:30

家族経営の栽培から採油、販売、オレオトゥーリズムまで手がける有限会社である。

社長はホセ・ヒメネス氏、弟のマノロ・ヒメネス氏が採油の責任を担っている。

本施設は1889年に搾油所(当時は圧搾法による採油)を購入し、オリーブオイルの生産をはじめ、1927年に有限会社を設立した。

オリーブオイルを生産するだけでなく、2011年にはオレオトゥーリズムのサービスを開始し、スペイン（特にハエン県）におけるオレオトゥーリズムのパイオニア的存在となっている。同社では現在までに50か国以上3万人余の訪問者を迎えている。ほぼ毎日訪問者があり、2020年についてはすでに151グループの予約が入っている。スペイン語、英語、フランス語にて対応しており、採油所には多機能の部屋（会議、テイastingセッション等）のほかショップも併設する。



伝統的な搾油機の前で



併設するショップ内で和三盆などを贈呈

（8）原産地名称保護制度【DOP : Denominación de Origen Protegida】組織 プリエゴ・デ・コルドバ本部訪問

11月7日（木）11:50～13:30

DOPとはEU内で導入されている、食料品の原産地名認定・保護のための制度である。今回、1995年に設立され、1999年にEUに認定された当団体に訪問し、活動事例を調査した。担当のフランチェスカ・ガルシア氏から当団体の活動事例等説明があった。

主だった活動は以下のとおり

- ・ D0 (Denominación de origen : 原産地呼称制度) に属しているオリーブオイル生産者の品質コンクール開催とオリーブ業界の貢献者の表彰
- ・ D0 に属しているオリーブオイル生産者のオリーブ栽培から製造までのコンサルティング
- ・ 子どもから大人までのオリーブに関する教育と文化普及。
- ・ 食事・料理などをそれだけでなくその歴史や文化的側面から考察するガストロノミー(ブロガーを利用したオリーブ文化のプロモーション)
- ・ DOP プリエゴ・デ・コルドバのエキストラバージンオリーブオイルを使った料理コンクールの開催
- ・ プリエゴ・デ・コルドバ観光局との協力によるオレオトゥーリズムなど多岐にわたる。

プリエゴ・デ・コルドバ自体が自治体であるが、DOP プリエゴ・デ・コルドバの領域は、4つの自治体、すなわち、プリエゴ・デ・コルドバ、カルカブエイ、フエント、アルメドからなっている。

これら 4 自治体におけるオリーブ園の内 60%が自然公園に指定されている山脈にあり、傾斜地園であるため労働条件は良いものではない。住民のほほすべてが直接、間接的にオリーブで生計を立てており、かといってオリーブに代わる産業はない。園地の環境条件から単位面積当たりの生産コストは平地に比べると不利である。そこで DOP による高付加価値化が欠かせない。



DOP プリエゴ・デ・コルドバのマーク(左)と
EU 認定のマーク(右)

DOP に認定されれば下記の DOP および EU 認定マークを使用できる。エキストラバージンオリーブオイルのみならず地域の農産物も対象である。毎年 6000 戸の農家と 12 の企業がこのマークをつけて販売している。

DOP 認定の条件は、①品種はこの地域で栽培されている「ピカード」、「オヒブランカ」、「ピカル」の 3 品種②官能評価でフルーティーの強度は 4.5 以上 (ボトリング時も同様に求められる)

③化学分析結果を満たす③園地管理

条件 (指導員が年間通じて巡回指導) ④原料となる果実は DOP 用に登録された園地のもの (果実を購入する場合購入先の園地も登録されていなければならない) ⑤容器は、ペットボトルは不可で、ガラス瓶であること (透明瓶は包装により光を遮断すること) 等である。毎年これらすべての条件を満たし、DOP 認定商品となるオイルは全体の 1 割程度とのことである。

DOP に関する生産者負担金は、生産量に応じ 2,000~10,000 ユーロである。DOP 認定マークは 1 枚につき 0.013 ユーロである。その一方で、経営規模の大きな農場では DOP 制度を利用せず自ら宣伝し販売しているところもある事実を否認しない。後継者育成面では、日本と同様で進学により農業以外に就職する機会がかなり増加したことによって、その子弟や若者が農業経営(ここではオリーブ生産)から離れ、農業就業人口が減ってきているので、農家経営は規模拡大は不可能であり、オリーブ生産拡大以外の収益性向上策として、ここでもオレオトゥーリズムが重要視されている。



本部にて活動事例等の説明を受ける



フランチェスカ・ガルシア氏を囲んで

(9) 在スペイン日本国大使館本部訪問

11月8日(木) 10:00~11:30

水上前大使が離任のため清水公使、青木一等書記官(経済問題担当)を表敬。清水公使からスペイン王国の産業や政情について最近の動向について情報提供があった本県からは香川県とスペイン、IOCとのこれまでの連携状況等について情報提供及び今後の展開について意見交換を行った。

【大使館の説明】

- EU加盟国内の農業は、EUの共通農業施策(CAP)によってEUから直接農業生産者に補助がある。今回の視察の目的であるオリーブオイルを例に挙げると、スペインのアンダルシア州の生産者などに直接補助があり、スペイン産のオリーブオイルの生産量は増加している。ここで特筆すべきは、そのEU加盟国外への輸出量も年々増えてきているという事である。今までは生産された農作物はEU加盟国内に輸出されていたが、現在スペインにしる、EU加盟国内にしる、人口の増加は見込まれない、どちらかというところ減少傾向にある中で、対EUだけに輸出するのでは先細りになるのは目に見えている。そこで、対アメリカや対アジアにもオリーブオイルを売り出そうという考えの現れで、これは、スペイン政府の一大方針でもある。

その他、清水公使からは、今後の本県のオリーブオイルの生産振興やその他ビジネス等を進める際に、スペイン大使館の持っている情報等を上手く活用いただければという心強い言葉をいただいた。



スペイン大使館にて現地の説明を受ける



清水公使を囲んで

(10) サンミゲル市場訪問

11月8日(木) 11:40~12:40

古くからある市場をガストロノミーマーケット(フードコート)として再構築した市場。オリーブはもとより生ハム、カメの手などスペインの産品の多くがここで楽しみ、観光客も含め年間1000万人以上の方が訪れる。オリーブをチーズなどと串に刺したものを1€~2€で販売しており、多くの方が購入していた。また、深夜24時(金、土、祝祭日前日は1時)まで営業しており、夜型観光のコンテンツとしても地域振興・活性化の一助にもなっている。



多くの方でにぎわう市場内



オリーブを利用した豊富なメニュー

7 成果と今後の取組み

今回、政府間機関である IOC、行政機関のハエン県議会、研究施設アンダルシア州立農業水産研究所(IFAPA)、その他生産団体であるオリーブ自治体協会(AEMO)などへの訪問を通し、現地の方の話しを聞く中でオリーブオイルの生産動向や現状・課題を把握することが出来た。

マドリッドに本部を置く IOC では、意見交換をする中で、小豆島における生産者がオリーブの実を早く、正確に、丁寧に摘む様子はまさにアートであるといった意見や本県の取組み、特にオリーブを利用した副産物（オリーブ牛、オリーブハマチなど）の商品開発に対して、このような事例は世界では香川県だけであり、学ぶところが大きい旨の御意見をいただいたことは大変ありがたかった。今後も、互いにオリーブ生産等に関し協力していくことを確認できた。

生産地であるスペイン南部のコルドバやハエンで我々が感じたことはその規模の大きさであった。地平線の向こうまで、見渡す限りオリーブ畑が続く景色は壮大である。スペインの国土は 50.6 万平方キロメートルと日本の国土とさほど違いがない。しかしながら、平坦な土地が多く、その土地その土地の気候にあった作物を生産し、今回訪問したスペイン南部のハエン、コルドバは昔からオリーブ生産が行われており、昨今では EU からの支援も受け、生産拡大し、スペインは世界で最も広大な 250 万 ha のオリーブ畑を持ち、オリーブオイルは世界の 50%を生産し、生産量はここ数年世界 1 位のシェアを誇る。今まで生産されたオリーブは主に EU 加盟国内に輸出されていたが、近年は EU 圏内の人口減少を背景に EU 加盟国以外のアメリカやアジアの国々への輸出量も年々増えてきている。

この地の生産者団体等を訪問する中で感じたのは、生産者と組合(自治体)と公的機関(研究機関)が緊密に連携を図り、産地形成を行っていたことである。

生産者は、オリーブ栽培はオリーブオイル生産だけでは競争力を持たない。競争力を持つためには、オリーブオイル品評会で上位入賞することが大切であると考えている。

組合(自治体)は、高品質なオイルとは何か、エキストラバージンオリーブオイルとは何か、を消費者に普及する消費者教育に力を入れている。そのため、見本市出展、マーケティングとプロモーション活動を行い、農業以外の分野との共同事業も行っている。また、近年では、結果として消費拡大につながるという意味でオレオトゥーリズムに着目している。オレオトゥーリズムとは消費者がオリーブの古木めぐり、収穫体験や採油体験を始めとする様々な体験を通してオリーブやオリーブオイルに親しむ観光形態である。産地に行かなければ提供できない非日常の経験や癒し、オリーブの文化や風土を体感することは、その産地のオリーブオイルとともに産地の文化やイメージと一緒に販売することであり、単にオリーブオイルを販売するだけではなく、その産地に新たな経済波及効果を生み出すことにつながっている。

公的機関(研究機関)は、生産者が抱える生産等の課題に対し答えるため研究を実施している。スペインでは、普及事業がないため日本でいう「普及指導員」はいない。そのため、研究所の研究者、各々の協同組合の指導員、DOPや協会の指導員が担わなければならない。現地指導を担う技術者は、栽培技術のほか、採油技術、官能評価技術が求められる。

このように3者が緊密に連携し、単なるオリーブオイルの製造販売という「製品志向」ではなく、ライフスタイルと自己表現、そして夢を売るという「市場志向」が市場の変化に対応でき生き残ることができるという哲学が見て取れたことは大変な成果であり、今後の本県の取組みのひとつの方向性を示していると考えられる。スペイン人にとってオリーブは産業であり、生活であり、文化であり、歴史であり、宗教でもある。消費が減り、価格が低迷する中であっても、広大な土地にオリーブを植え続けている。日本人にとっての稲作と同じような大切なものなのであろうと感じた。

また、今回訪問したハエン県議会では、先方からこの訪問を契機に香川県と何らかの交流を行いたいとの提案があった。オリーブオイル生産・振興に係る先進地であるハエン県議会との交流は双方のオリーブ振興に資すると確信しており、技術的な面はもとより、人的・物的な面からも積極的な交流が望ましいと考える。